

明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成

佐藤, 慶治

<http://hdl.handle.net/2324/1831394>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (比較社会文化), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	佐藤慶治			
論文名	明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	嶋田洋一郎
	副査	九州大学	教授	福元 圭太
	副査	九州大学	教授	松永 典子
	副査	九州大学	准教授	施 光恒
	副査	熊本大学	准教授	瀧川 淳

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治期の唱歌教育を概観し、「翻訳唱歌」が当時の唱歌教育の形成と国民形成において果たした役割について原曲歌詞との比較を通じて考察することによって、同時期の唱歌教育が国民形成に及ぼした影響を包括的に論じたものである。

論文の構成は、序章、第1章、第2章、第3章、終章から成る。

序章では先行研究とその問題について論じ、従来の研究が最初期の研究に集中していることと、歌詞分析が不十分であることを指摘した。こうした点をふまえ、本論文では「翻訳唱歌」と原曲の歌詞との比較考察を行うことによって、当時の日本で必要とされていた教育や社会的状況を明らかにすることが目的とされる。

第1章では、明治期日本の「国民形成」・「翻訳唱歌」についてその起源を求める形で論じた。第1節では「国民形成」の定義を近代の日本に当てはめて考察を行うことで、日本が西洋より輸入した文化をナショナリズム的な観点から日本化したという結論が得られた。第2節では宗教改革時代のコントラファクトゥア、すなわちプロテスタント教会における賛美歌の作成法が19世紀米国の音楽教育を通じて明治期の日本に受容された様子を明らかにし、コントラファクトゥアを改変したものが「翻訳唱歌」であると結論づけている。

第2章では、日本初の官製唱歌集である『小学唱歌集』について唱歌の歌詞について原曲の歌詞との比較を行った。その結果として、原曲はキリスト教の教義に基づくものが多く、それを除去して儒教的な要素を後付けする、もしくは、キリスト教の神を讃える賛美歌的な内容を、天皇や(神道の)神への賛美へと改変しているという二つの翻案パターンが導き出された。また「季節」をキーワードとして「翻訳唱歌」の分析を行った結果、自然を表わす季語をはめ込んだ翻案が行われていることが明らかになった。

第3章では、明治期の民間製唱歌集に関して楽曲歌詞の分析を行った。大和田建樹編『明治唱歌』については、結論として『小学唱歌集』と異なる唱歌作成方法、すなわち「四季の定型化を行わない」、「翻訳する場合でも無理やり教訓や忠君愛国の要素をあてはめない」、「君が代、忠君愛国に関する歌詞の割合を減らす」、「新体詩の思想に基づいた作詞」といった点が明らかにされた。また本章では、明治期の唱歌教育が「ジェンダーの創出」とも結びついていることも指摘された。

終章では、明治最後の官製唱歌集である『尋常小学唱歌』について論じた。その結果、『尋常小学唱歌』は、それ以前の官製唱歌で見られた「徳育」や「君が代、忠君愛国」、「教科統合」や「言文一致」、「ジェンダー」、「美感」などの要素を内包しており、いわば明治期唱歌教育の集大成であったこと

が明らかにされた。こうした考察によって、明治期に西洋音楽教育を導入した日本人が、日本の伝統も生かしつつ「翻訳唱歌」を自国文化として同化していった過程が明治期唱歌教育であるという結論が得られた。

このように本論文は、明治期の唱歌教育を概観し、特に「翻訳唱歌」の分析を中心として「翻訳唱歌」が当時の唱歌教育と国民形成において果たした役割を包括的に考察したものであり、その学術的な意義は次の点にある。1. 「翻訳唱歌」の源流が宗教改革時代のコントラファクトゥアにあることを明らかにした。2. 最初の官製唱歌集『小学唱歌集』においては原曲のキリスト教的内容が儒教的要素に改変されていることと、翻訳に際して伝統的な季語を付加した翻案が行われていることを明らかにした。3. 民間製唱歌集の分析を通じて「言文一致」など官製の唱歌集とは異なる視点の存在を明らかにした。4. 明治期最後の官製唱歌集『尋常小学唱歌』には『小学唱歌集』以来のすべての要素が内包されていることを明らかにした。

本論文は、これまで個別のテーマや時期に限定されていた当該分野の研究を大きく促進するものであり、よって論文調査委員会は、全員一致で本論文が博士（比較社会文化）の学位論文として十分な水準にあると判断した。